

鐘の鳴る丘

昭和20年代後半東筑摩郡和田村での思い出。

夕方、遊び疲れて家に帰ると「笛吹童子」♪♪ヒャラーリヒャラレーコ、ヒャリーコヒャラレーロ、何処で吹くのか不思議な笛だ・・・」「三太物語、おらー三太だ」などラジオ子供番組が流れていた。夢中になって聞いたものだ。その時間帯だったか定かに覚えていないが「鐘の鳴る丘」♪♪緑の丘の赤い屋根、トンガリ帽子の時計台、鐘が鳴りますキンコンカーン、メーメー仔山羊が鳴いて一ます・・・」、菊田一夫原作古関裕而作曲の名作、親を失った戦争孤児達を復員兵が共同生活しながら育てる物語だった。後に映画化もされて「有明高原寮」が舞台に使われたそうだ。

昭和23年（1948年）厚生省（当時）調査によれば、孤児総数約12万人、戦災孤児約3万人。都会ではしばしば街なかにとむろしていた孤児を、警察や行政が「浮浪児狩り」という強制収容を強行した。確保された孤児ら（全体のごく一部だろうが）は、衣食住が保証されたからかえって幸いだったと思う。保護されなかった孤児達、投稿者（81歳）より年上の皆さんは孤児院（現児童養護施設）など殆どなかった頃、食べ物が乏しい極貧時代にどのようにして生を繋いで行ったのだろう！！昭和31年（1956年）、小学校6年（和田小学校）東京へ修学旅行で上京した折、上野駅地下道の両側に莚（むしろ）に包まっている子供達を見て、まだ続く戦争の傷跡を実感したことだった。

死亡したり負傷した旧軍人や遺族には「軍人恩給（累積60兆円）」が支給され手厚く保護されたが、民間被害者へは「契約関係が無かったから保証する必要がない」という詭弁のもとに、これまで一顧だにされていない。日本以外各国は全て支給されているのにもかかわらずだ。戦災孤児らへの手立てについては言うに及ばず。

ところで昭和23年（1948年）、”米兵による婦女子への暴行を防ぐ目的”といううたい文句で「特殊慰安所（全国10箇所）」が設置された。当時1億円（現在価格で数千億から一兆円）の巨額予算。査定責任者は大蔵省（当時）主税局長、池田勇人（後の総理大臣）。「一億で婦女子らの貞節が守られるなら安いものだ」は有名な言葉。慰安婦総数約7万人。因みに女性兵士のために多くの「慰安夫」も採用された。体格検査に合格した屈強な若者らの手記が残っている。「毎日ビフテキをたらふく食わされ、重労働。良くもって二ヶ月、みんな逃げ出してしまった！」。この予算の一部でも孤児らの為に使われていたら、とつくづく思う。一歳未満を含む20歳以下の孤児達、多くの皆さんは既に鬼籍入りだろう。国家はなんと残酷な仕打ちを重ねて来たことか！国民に理不尽な戦争を強いたことは言うまでもないことだが。4年足らずで現在価格2000兆円以上（研究者によっては8000兆円以上）と試算される国富と、320万人の人命を失うとともに近隣諸国に2000万人以上の死者をもたらした。なんという馬鹿げたことをしたことだろう。

2025年11月 小松 泰彦